

発表テーマ

大学を核とした「(仮称) キャンパス特区」による若者を引き付ける都市づくり

1. 提言が解決を目指す社会の問題や課題とその背景

現在、熊本県、市では本年3月に九州新幹線鹿児島ルートが開通し、来年4月1日には、政令指定都市に移行予定など大きな転換期を向かえ、これを契機に熊本城をはじめとした歴史遺産や清らかな地下水・豊かな緑などの自然環境を観光資源として都市のブランド化（わくわく都市くまもと）を推進している。

しかし、この新幹線開通によって、観光客の増加など多くのメリットがもたらされる反面、他の都市との競争が激化していくことも予想され、地元マスコミによれば、決して楽観的な論調とはなっていない。

また構造的な問題である、若年層を含む県内人口の減少、高齢化は、今後の熊本の県勢にも多少なりとも負の影響を与えることが予想される。

熊本は大学の集積度も高く、熊本市内における学生数（人口一人当たり）は全国政令都市中6番目に位置するなど、学生が多いことも大きな特徴である。しかしながら、学生が総体として熊本のまちの中で何かの役割を發揮するなど、積極的に存在感を示すことはあまりない。熊本はこれまで「学都」と言われてきたが、「学都」の魅力が消滅してしまっただとも言える。大学受験に際し、日本全国から熊本を選ぶだけの魅力を感じてもらえるかどうか疑問である。

熊本大学を例にとれば大学、県、市の三者で「くまもと都市戦略会議」を発足させ、コンベンション都市づくり・学生のまちづくり・熊本駅から中心市街地に向けた賑わいの創出をテーマに取り組まれている。センターの設置や学生のまちづくりへの参加など大学と地域の交流は近年活発であると言えるが、実のところ学生相互のつながりについては話題が少ない。若者コミュニティの希薄化を指摘したい。

■ 県内人口の減少、高齢化（若者の流出）

熊本県の人口は、2000年1,859,344人、2005年1,842,233人、2010年1,817,410人と2000年以降は年々減少を続け2005年から5年間で24,823人減少している。そのうち、65歳以上の老年人口をみると2000年396,020人（県の総人口に対する割合21.3%）、2005年437,244人（23.7%）、2010年465,743人（25.7%）と増加しているのに対し、15歳未満の年少人口は2000年288,654人（15.5%）、2005年264,013人（14.3%）、2010年251,350人（13.9%）と減少し、高齢化社会が急速に進行している。 ※図表1

また、15～19歳の人口移動状況は、2008年4,158人、2009年4,079人、2010年3,393人と県外への転出者が他の年齢と比べて顕著であり、そのことは県内の大学進学想定年齢の人口が今後減少していく傾向が予想される。 ※図表2-1、2-2

■「学都」の魅力が消滅（都市の魅力度が低い）

我が国では旧制高等中学校は 5 校、その後旧制高等学校と改正され 8 校が創設された。これらはナンバースクールと呼ばれ、熊本には、東京、東北、京都、金沢に次ぐ旧制第五高等中学校が創設され、現在の熊本大学の前身として、夏目漱石、小泉八雲をはじめとする教師が配属され、寺田寅彦、池田勇人、木下順二など物理学者、政治家など輩出し、学都と呼ばれるにふさわしい時代があった。

■若者コミュニティの希薄化（横のつながりが弱い）

若者は個人単位で、横のつながりが薄い。特に、大学ではサークルなどへ参加しなければ居場所もない。学生がグループで話題になるようなことは少なく、若者の活動が市民にアピールできていない。

2. 提案の目的

熊本県内には大学・短期大学等が 14 校在り、合計 3 万人の学生が学び暮らしているが、県、市あるいは市民にとってその存在の大きさの重要性については認識が薄い。例えば、その学生の存在は年間 300 億円（100 万円/人）の経済効果を生んでいると言われており、また、県内の 15～22 歳代の若年人口が減少していく中で担保された定住人口とも捉えることもできる。このように学生が熊本というまちをベースに、誇りと存在感を示しながら生き生きと学び暮らし、憧れの感じられる、若者を引き付ける魅力ある都市づくりを目指す。

今回の提案は、キャンパス特区として、熊本大学を含めた近接する 4 つの大学を中心に、学生の、学生による、学生のためのにぎわいの場を仕掛け、それをモデルに県内の大学を有機的につなげていく都市づくりを提案する。

3. 提言内容の根拠や検証

特に熊本大学を中心とした半径 1km の範囲には熊本大学を含め 4 つの大学があり、九州の他の都市にない特徴を持っている。 ※図表 3

1) 立地環境

九州ルーテル学院大学と熊本大学北キャンパスを合わせた地区と熊本大学南キャンパスの間を県道 337 号線が走り、その北には立田山自然公園が近接している。熊本大学南キャンパスに沿って白川が流れ、その白川には子飼橋・竜神橋が架かり、産業道路を挟んで熊本学園大学が立地している。東海大学熊本キャンパスは JR 豊肥本線と熊本東バイパス 57 号線に挟まれたエリアに立地している。

2) 各大学の特徴

・熊本大学黒髪キャンパスー重要文化財建造物が点在し、歴史と自然が残るキャン

パス（事務局、文系、理系、特別支援学校）学生数 10,277 人。

- ・熊本学園大学一語学学校を前身としており国際交流にも力をいれている。統一されたデザインで西日本屈指の美しさを誇る快適な環境のキャンパス（商学、経済、外国語、社会福祉）学生数 6,848 人。
- ・東海大学熊本キャンパス一キャンパスとしてはコンパクトだが、全国のキャンパス間留学制度などもあり、学びのフィールドは広い。（経済、産業工学）学生数 812 人。
- ・九州ルーテル学院大学一キャンパス内に中学・高校を併設し、チャペルがあり礼拝なども行われている。（人文）学生数 600 人。

3) 学生を結びつける仕掛け

① 提案 1：公用地の整備（ハードによる仕掛け）



4つの大学を中心として、その周辺若しくはそれをつなぐ動線上に、歩いて安心、自転車で快適なみちづくりと、木陰の心地よいポケットパークを整備し大学をつなげる

結果 1：ハードの仕掛けによって大学がつながるカタチが見える

② 提案 2：学生イベントを結びつける（ソフトの拡充）



提案 1 のみちづくりとポケットパークで大学をつなぐイベントの展開をして学生をつなげる

結果 2：ソフトの拡充によって学生と学生がつながり交流が見える

③ 提案 3：学生と住民を結びつける（ソフトの拡充）



中心地で行われている熊本市恒例のイベントを大学周辺で展開して学生と住民をつなげる

結果 3：ソフトの拡充によって学生と住民がつながり交流が見える

④ 提案 4：学生と留学生のつながり（ソフトの拡充）



各大学キャンパスと周辺の歴史資源をつなぐ **Historic Zone** を解説する学生と、海外からの観光客に解説する留学生をつなげる

結果 4：留学生の参加によって新たなつながりの可能性が見える

4-1. 具体的な提言内容 その1

～にぎわい（ハードの仕掛け）～

- ① 道路と公園（ポケットパーク）の整備で大学をつなげる
- ② 白川河川敷と橋の整備で大学をつなげる

③ サイクリングロードで歴史的文化遺産をつなげる

■緑・水辺・文化で大学をつなぐ ※図表4

つながれた各大学間を行き交う手段は直線距離にして 1km 程度であるので自転車又は、徒歩が考えられる。自転車と言えば、最近、自転車による事故が相次いでいる。アーケード街でも若者の自転車マナーが悪く、指摘を受けている。熊本大学周辺でも歩道が狭いこともあり、事故が多い。若者の自転車マナーの改善が求められると共に、高齢者を中心とした歩行弱者が安心安全に歩くことができ、自転車も快適に通行できる道路の整備の要求は強い。

□緑で大学をつなぐ

各大学とその周辺をつなぐ歩行者と自転車専用の道路を整備する。既存道路の拡幅や新たな付け替えも含む。また、現に点在する公園や未整備の公用地をポケットパークとして整備し、にぎわいの場をつくる。道路沿いのちょっとしたふくらみも人が話せるスペースさえあれば、そこににぎわいが生まれる。

□水辺で大学をつなぐ

白川は身近に水と緑が親しめる貴重な空間であるが、大学間をつなぐという観点から言えば、地理的に相反している。ここにハードの仕掛けを追加することで、にぎわいの場をつくる。「白川の水辺空間計画」での基本方針である河川沿いの歩行者道または自転車道のネットワーク整備とリンクすることで展開をより具体化させる。既存計画と連続性を図りつつ、既存橋の改築、水辺公園の整備を行うことで熊本大学南キャンパスと熊本学園大学キャンパスをつなぐ。また、西原地区に整備されている小蹟水辺公園に近接して新たな橋の整備を行うことで熊本大学黒髪キャンパスと九州東海大学熊本キャンパスをつなぐ。

□文化で大学をつなぐ

熊本大学や周辺に点在する文化建造物は、教育資源、市民遺産、観光資源として非常に重要な存在である。しかし、アクセスの悪さや観光としての関連性が低く、直接見て触れる機会が少ない。北は登録有形文化財のリデル、ライト両女史記念館から九州ルーテル学院大学にある登録有形文化財の高等学校本館、熊本大学にある有形文化財の五高記念館・化学実験場・赤門・機械実験工場、登録有形文化財の熊本大学本部、南部には有形文化財の徳富旧邸、熊本学園大学にある登録有形文化財の産業資料館、九州学院にある登録有形文化財の講堂兼礼拝堂まで大学キャンパス内の文化建造物を取り込んで専用道路でつなぐ。

専用通路は電鉄北熊本駅から豊肥本線水前寺駅まで延はずことで観光客も取り入れる。周辺の文化財建造物とキャンパス内を散策するルート（Historic Zone）を整備することにより学生と住民及び観光客とのにぎわいが生まれる。

緑・水辺・文化を目線で感じながら人が行き交う、出会いのあるクロスロードとなる。

■クロスロードと電チャリシステム

河川沿いの道と文化をつなぐ道を総称してクロスロードと名付ける。クロスロードの各所にあるポケットパークが休憩所となり、にぎわいをつくる。大学と文化建造物及び周辺のスポットを案内板で紹介し、人が行き交う。

主要なポケットパークには自転車の駅を設け、太陽光エネルギーを利用したナビゲーション付きの電動アシスト自転車を貸し出す。各駅ではバッテリーの交換ができる。放置自転車対策としては利用者を登録し、ICカードによって管理をする。「熊本市自転車利用環境整備基本計画」の観光型レンタサイクルと共同し、リンクすることで展開をより具体化させる。

■整備方針 ※図表5

①景観（緑地、照明、セキュリティー）

- ・自主管理しやすい樹種、木陰をつくる緑化
- ・照明による安心安全で死角をつくらない空間づくり

②ユニバーサルデザイン（バリアフリー、サイン）

- ・誰もが歩きやすく、自転車も走りやすい段差のないみちづくり
- ・人にやさしくデザイン性あるサイン、ベンチなどのストリートファニチャー

③環境配慮（太陽光エネルギー）

- ・近隣大学までの行き来に便利な電チャリシステム
- ・太陽光エネルギー利用のバッテリーシステム・照明・誘導光の導入

④通信（衛星ナビゲーション、ツイッター）

- ・携帯端末を活用したコンテンツ配信と誘導システム
- ・大学サテライトを活用した情報発信システム
- ・フリーマーケットによる情報交換の場づくり

4-2. 具体的な提言内容 その2

～大学間の交流（ソフトの拡充）～

- ① オープンキャンパスで学生をつなげる
- ② サークル、イベントで学生をつなげる
- ③ 情報交換、展示で学生をつなげる

□オープンキャンパスで学生をつなぐ

既に行っているオープンキャンパスや大学祭を、大学だけではなく、熊本の良さ、キャンパス特区エリアの住みやすさも知ってもらう機会とする。

前述のハードの仕掛け「河川敷」「道路」によるクロスロードで大学間を行き交い、「ポケットパーク」でPRする。

これらのオープンキャンパスや大学祭は全大学情報を盛り込んだイベントカレンダーにして、誰でも興味ある人が参加できるように工夫する。

□サークルで学生をつなぐ

学生を取り巻く環境を自らよりよくする仲間で「キャンパス特区」を考えるサークルを創設し、くまもと都市戦略会議や行政に働きかける。

一方で、オープンキャンパスや大学祭の全大学情報イベントカレンダーを作成し、それらをつなぐイベントを組立てる。

□情報交換で学生をつなぐ

これらのソフトの取組みを行いながら、情報交換しやすい環境を整え、大学情報及びイベント情報をストックし、中心市街地に設置された各大学のサテライトに常に各大学情報を展示できる状態をつくりだす。

4-3. 具体的な提言内容 その3

～住民との交流（ソフトの拡充）～

- ① みず灯り（水辺）で学生と住民をつなげる
- ② ポケットパーク（公園）で学生と住民をつなげる

□みず灯りで学生と住民をつなげる

熊本では、「みず灯り」「水打ち」などが熊本城周辺及び中心商業地で行われ、恒例のイベントとして定着している。それらのイベントを、白川の河川敷整備を機に中心市街地から白川で大学方面へつなぐ取組みへ展開する。

□ポケットパークで学生と住民をつなげる

熊本大学のまちなか工房をはじめとする大学のサテライトでは、研究発表やまちの方と一緒に社会的課題に取り組む場となっており、キャンパスの枠を越えた活動として期待が高まっている。そこで、学生を中心としたより垣根を低くした、情報「市」としての性格を持つ学生フリーマーケットをポケットパークで実施する。そこに学生と住民とのにぎわいが生まれる。

4-4. 具体的な提言内容 その4

～留学生の参加～

① 新たなつながりの可能性

□留学生と学生をつながり

留学生が研究以外で期待され、自分の持つものを発揮でき、少しお小遣いにもなる。そんな機会が増えれば、留学生活も充実するのではないか。文化建造物をつなぐ仕掛けができれば、留学生が出身国からの観光客を案内する仕組みができる。Historic Zone を解説する学生と留学生のつながり交流が生まれる。日本語の勉強のために日本人観光客を案内することも経験になるし、留学生本人も大学の文化資源や地域文化に触れる機会となる。これらのことを通して、熊本という都市の国際化のPRにもつながる。

5. 考察（期待される効果）

学生のコミュニティが充実し、熊本のまちに積極的に存在感を示すことが可能。学生が集まりにぎわいが生まれ、また学生が集まる。「学都」の魅力を再確認する。

学生が主役の学生のための環境づくりが可能。都市工学の学生にとっては、自らの提案を具現化できる機会、また社会学の学生にとってはコミュニティの直面する課題のケーススタディ、語学を学ぶ学生にとっては海外からの観光客へのネイティブな対応など、学生が社会参加する機会を得ることができる。

6. 考察（実現可能性）

ハードの仕掛けについては、ポケットパーク、河川敷整備、竜神橋をはじめとする橋の整備、道路整備など公共事業であり、自ら出来ることではなく、実現可能性は低いことが想定されるが、既存の公園を利用することや、実際にある計画に沿った整備であるのでこれらのモデルをさらに周辺のキャンパスに展開するイメージがしやすいと考える。

7. 考察（限界や乗り越えるべき課題とその対処方法）

ハードな取組みについては、熊本の大学にとってどれだけ有用な取組みとなるかが、その判断基準となる。したがって、ハードの仕掛けを使ったソフトの拡充がどれだけの交流を生み出し、楽しさが波及するものであるかが課題となる。

その対処方法としては、やはり「学生」の存在である。特に、学生自らが自らの置かれた環境をよりよくしたいと願い、そしてその仲間づくりが多くの大学と手を結ぶことができるか、ここにかかっていると考える。

(高等教育コンソーシアム熊本／高等教育機関マップより)

